

「佐賀県の稲作坪刈帳」より見た稲作技術の変遷

九州における近世代の稲作技術史（第2報）*

嵐 嘉 一

（てん菜研究所支所）

本報の考察に用いた資料は、早川孝太郎氏校にかかる上記¹⁾のもので、徳川後期（1780年頃）より昭和10年ごろにおよぶ概ね150～100年間にわたり、佐賀県東松浦郡厳木、相知町（旧4ヵ村）で行なわれた坪刈帳の記録である。その旧4ヵ村は浪瀬（A）—1780年より一、町切（B）—1804年より一、湯屋（C）—1841年より一、横枕（D）—1830年より一の各村で、これらの地方は厳木川に沿った概ね標高百数十米以下の浅い中山間または準平坦地の性格を持ち、(A)→(D)に向うほど少しずつ平坦地の性格が強くなっている（C、Dはほぼ同じ）。

記録は村別に年次ごとに数点～数十点の坪刈場所、刈取期、品種名、坪当株数および籾収量が誌されており、近年ではいくらか作況、災害の記録なども見出される。著者はこの資料を種々の角度から整理し、品種の変遷、それから推定される田植期の動きならびに栽培密度など

の動きについて、本報で報告する。

なお、この資料は坪刈の場合の単位面積のとり方、測定用樹、測定方法について、1地区1年次では同様であるが、年次別では変化のある場合があるので、収量に係る事項についてはごく大局的な比較を行なうに止め、その経年変化の考察は故意に省略した。

品種の早中晩別の変遷 栽培品種の早中晩別熟期を同記録に示された刈取期の年次別変異から見ると、第1表のようである。これを基として、早中晩別の分類を行ない、品種の早晩別の推移を示せば、第1図のようである。2つの村では若干傾向がちがうが、この期間内の初期では早稲と中稲とが相半ばし、その後中稲がいくらか増加し、早稲消滅後は1時中稲のみとなるが、間もなく晩稲が入り、急激な増加を迎えている。なお、第1図のA村で“わせ”とあるのは、当時早稲の中心品種であっ

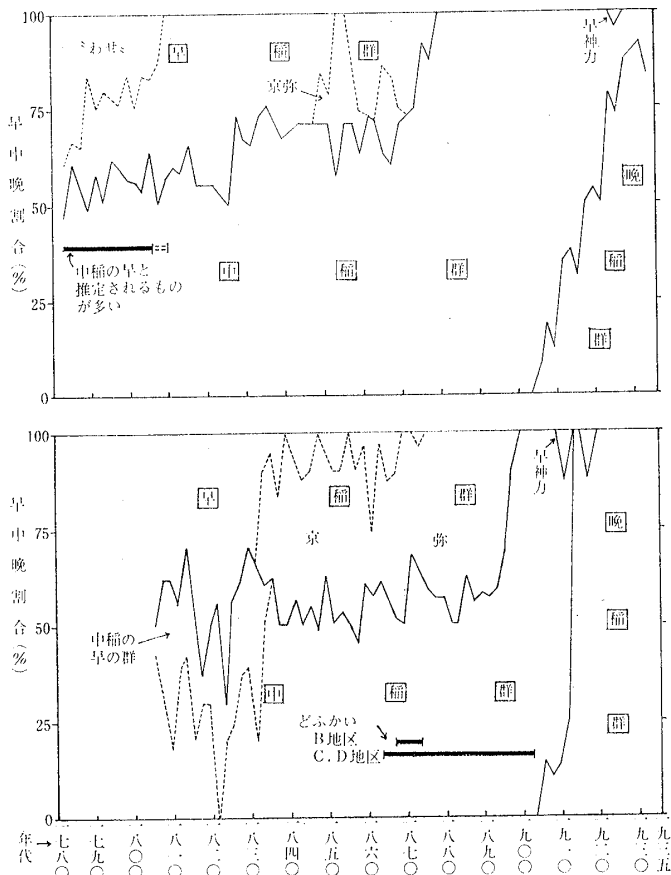
第1表 刈取期の年次別変異（主として浪瀬村）

期 間	早 晩 別	8 月			9 月			10 月			11 月		
		1	11	21	1	11	21	1	11	21	31	10	20
1805	早 稲	●	●	●	●	●	●	●					
1834	中稲の早 (山城・柳川)		●	●	●	●	●						
	中 稲				●	●	●	●	●	●	●	●	●
1836	早稲の晩 (京弥)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
1897	中 稲		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
1898	中 稲 ¹⁾		●	●	●	●	●	●	●	●	○?	○	○
1911													
1912	晩 稲 ²⁾										○	○	○
1926											○	○	○
1927	晩 稲											○	○
1935												○	○

（備考）●旧暦 ○新暦の日、1), 2)はそれぞれ1部晩稲、中稲を含む。

*昭和42年1月27日 第37回講演会で発表

第 1 図 早中晩別品種群の変遷



【上図】浪瀬村(A)―浅い中山間地区
【下図】町切村(B)―準平坦地区

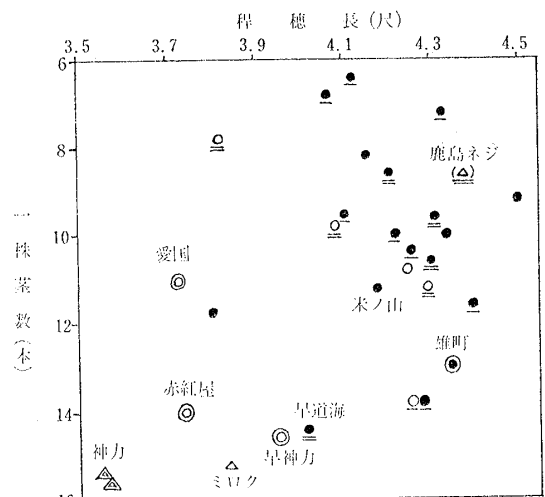
た、伊勢荒木”に比し約85%の収量しか示さず、他の点から見ても特に早熟なものを含む1群と推定されるものである。これに反し、早稲のうち後期に普及の多かった“京弥”は「早稲の晩」に属している。中稲についても、初期には“京弥”とほぼ同熟の「中稲の早」の品種が多く、これらは現在の熟期の基準からは早生と判定されるものである。このように、「中稲の早」をも早生に含めると、18世紀後期では早生が著しく多かったことになるが、漸次中生中心となり、やがて晩生主体に急激に移っている。早稲の消滅期は旧4ヵ村全体で見ると、1870~80年、晩稲（神力）の導入は、1900年前後であった。なお、神力の導入は平坦部の方が中山間部に比し、僅かに早く、またその後の伸展もとくに早かった。

主要品種の変遷とその特性 旧4ヵ村における品種の変遷を坪刈供用品種の出現率で示すと、概略第2表のようである。年代別に見ると、早稲では、いせあらき、つるほそ、いせわせ、京弥。中稲ではふくとく、福弥六、とそん、中願寺、筑前ねち、米ノ山、雄町。晩稲では神力、旭、神山などが最も主力であった。なお、第2表中の“みろく” “どうかい” は「晩稲の早」か「中稲の晩」に属するもので、これらを晩生に含めると、晩稲の導入

年次は前述の神力の場合よりかなり早くなる。“どうかい”と称する品種中にはかなりの変異を含んでいたことが認められるので、ここに示されたのは刈取期の関係から主として早道海（中稲）の類ではなかったかと思う。

次に、これらの品種中、早神力、万作、雄町、神力以前に普及していたと思われるもので、大正3年に集められた「佐賀県主要稲品種特性調査」²⁾中の品種と対照しつつ、厳木、相知若くは、これと近接した東松浦郡から取寄せられた同名またはほぼ同一と推定される品種について、同特性表から2、3の特性を整理すると、第2回、第3表のようである。これらの品種は神力に比べると、いずれ高稈で、その大部分は1株穂数が少なく、穂重型品種が主体で、その中には極端な高稈、穂重型のものもかなり含まれていた。神力の草型にやや近い品種は比較的後期に導入された早生、晩生のものでいずれも平坦部向きのタイプと考えられる。後期導入種に比し、粒大については同じか、やや小さいものが多く、品質に

第 2 図 当時の普及品種の特性(1)



(備考) 1. ○早生 ●中生 △晩生
2. 取寄先: 一印は東松浦郡, 二印は厳木相知町

第 3 表 当時の普及品種の特性(2)

早 晩 別		早稲	中稲	晩稲
粒 大	大	3 ²⁾	8 ³⁾	2 ⁴⁾⁵⁾
	中	1 ¹⁾	8	2
	小	5	2	
品 質	上 下		3 ³⁾	
	中 上	2 ¹⁾	4	1 ⁴⁾
	中	3 ²⁾	4	2 ⁵⁾
	中 下	3	6	1
	下	1	1	

(備考) 1) 早神力 2) 愛国 3) 雄町
4, 5) 神力の位置

第2表 主要品種の変遷(4カ村合計)

年 代		一、七八〇	一、八〇〇	一、八二〇	一、八四〇	一、八六〇	一、八八〇	一、九〇〇	一、九二〇	一、九三五	分布村							
4 か村延年数		10	10	17	20	20	30	40	38	40	39	33	38	36	36	35	20	
(早稲)	(早) “わせ” (早稲)	7	10	6														A
	いせあらき	5	10	16	19	10	4	2										A B D
	つるほそ			11	18	12	8	5	4	4								A B
	黒わ せ						7	10	3	1								A B D
	いせ わ せ*						1	10	12	24	9							C D
	(晩) 京 彌(六)*						10	23	27	25	15	8	7					
	べ ん 彌*							1	1									A
	清 (千代) 竹*								8	9	3							D
	早 神 力															1	1	
	(中稲)	(早) 十 兵 衛	8	1														
(〃) ふ く と く		9	5															A
(〃) 西 国		4	2	3														A B
(〃) と さ ん と		4	8	5	1													A
(〃) さ ん き		7	10															A B
福 彌 六		4	14	12	7	10	7	3			1							
と そ ん 城		1	4	2	7	15	25	24	11	1								A C D
(早) 山 川			3	7	1													B
(〃) 柳 川			1	5	6	3												B
四 中 願 寺*				3	2													A
彌 平 坊 主					6	17	7		2									
豊 前 坊 (主)*						16	1											A B D
万 筑 前 ね ぢ*				1	4	7	4						1		1			B
筑 前 坊 主*								27	35	27	12	10	6	13	5	2	3	
ど う か い*								2		13	3		1					
米 ノ 山*										16	10	1	6	6				B C D
岩 屋 稔*										9	34	33	37	25	2			
万 作 町 ま										2	3	13	9	4	6			
雄 さ つ												1		1				
														6	17	11	2	
														2				
(晩稲)	(早) み ろ く*			1		2	3											
	(どうかい) *							16	10	1	6	6						B C D
	神 力										2	21	32	34	7			
	目 利											4	1					
	曲 玉												1					
	西 ノ 宮													1				
	晩 7 号															1		
	相 徳															7	1	
	旭															6	10	
	神 山 徳															3	17	
															1	4		

(備考) *印品種は後掲の第2図、第3表と関連する。

第 5 表 坪 刈 区 に よ る 坪 当 り 株 数 の 変 異 (概ね 5 カ年間の区分)

村 名	年 代	年代	坪 当 り 株 数								計	M(株)	V(%)			
		区分	30		40		50		60					70		80
浪 瀬 (A)	1784~1788	I						2	6	17	15	5	4	49	70.2	8.5
	1828~1834	II				1	7	9	17	7	1	1		43	60.9	9.8
	1872~1876	III	1	8	12	13	9	1						44	45.3	12.6
	1926~1930	IV				5	17	19	14	2				57	56.7	8.8
横 枕 (B)	1832~1837	II				1	8	15	14	4				42	58.9	8.1
	1867~1872	III		2	12	14	4		2					34	47.2	11.5
	1919~1935	IV			1	9	26	6	1					43	52.2	7.0

のようである。各村とも坪の単位が 6.5 尺坪から途中で 6 尺坪に切換えられているので、本図では全部 6 尺坪の数値として表示した。ただ町切村(B)についてはその切換年次がやや不鮮明であるので、途中年次に一部 6.5 尺坪の値がまぎれ込んでいる可能性がある。

坪当株数は、本記録の示す初期では 1 村平均値で概ね 70 株前後であったが、その後漸減傾向を示し、途中 1830~40 年の間に一時やや高まり、その後減少程度がやや大きく、概ね 1890~1900 年の間に最少の 40 株前後となっている。その後再び増加傾向を辿り、1930 年頃では 50~60 株に上昇している。ただし浪瀬村では最少期がやや前にずれている。勿論 1 村 1 年次について見ると場所によってかなり広い変異を示しているが(第 5 表参照)、その多少と品種および他の条件との関連を求めることは本記録の範囲では無理である。ただ、村別に見るとその地勢的な特徴との間に関連があり、中山間村にやや密で、平坦村にやや粗の傾向が認められる。

とくに品種と坪当株数との関係は明らかでなく、中稲中心期が最少で、晩稲の神力の導入に伴ってむしろ増加

の傾向が認められる。当時神力は出色的な多蘖な穂数型品種であり、その導入が粗植化の方向へ導いたとする考え方もあるようであるが、ここではそれを証することはできない。しかし、他の資料から見て、神力の導入は 1 株苗数の方をいくらか減少させたことは考え得られるようである。1900 年以降は稲作の技術指導が漸く実を結び始めた時代と考えられるので、むしろ従前の粗植への行過ぎに対する是正であったとも考えられる。

なお、坪当株数の多少は育苗(播種量、苗代日数)田植様式(乱雑、片正条、正条植)、施肥量および災害(とくに水害)、その他とも関連が深いと思われるが、それらの点については今後当地方での資料が得られた上で考察したい。

参 考 文 献

- 1) 早川孝太郎校(1950): 佐賀県の稲作坪刈帳 農業総合研究刊行会。
- 2) 佐賀県農試(1915): 佐賀県主要稲品種特性調査。